

(略) 明治44年7月19日から降り続いた豪雨による氾濫は、『常呂村史』によると、「にわか
かに常呂川の増水となり手師学、太茶苗方面より順次下流に氾濫して、土佐団体の一部を
除きほとんど浸水し、太茶苗、川沿方面にありては、床上二尺から五尺に及ぶ」とあるが、
この天災には、木材の流送とそのため設備が人災として加わり、氾濫による流域住民の
被害をいっそう助長したのであった。明治の40年代から大正時代にかけて、また輸送手段
としての林道を含む道路も開かれず、車馬の数も乏しかったころ、道内の河川が運輸に利
用されたように、常呂川でも、はるか上流の大雪山系の森林で伐採された丸太材の流送が
行われ、河口付近で集積されたのであった。そして流送の効率を高めるために、川を横断
して、通称網場(アバ)といわれる堰を築き、満水した水をいっきよに放水、その勢いを
もって木材を大量に流し込んだのであった。『常呂村史』によると常呂村5番地にあるサ
ケ・マスふ化場(注：昭和12年当時存在)付近にこのアバがあり、氾濫時に野付牛方面か
ら流送されてきた丸太が約2万石ほど滞積しており、これが川の水位をいっそう高め、溢
水を助長した。かくて沿岸の農漁関係の住民からは、はげしくアバの撤去をせよという叫
びが高まる一方、木材業者は2万石の木材をむなくオホーツク海に放流する決心もつか
ず、村当局と駐在警官も困惑して決断を下せず、結局上級監督庁の指揮を仰ぎ、アバを撤
去する非常手段をとったのであった。『村史』によると「両者の対立喧嘩を極め一時は事
態容易ならざる状況」と暴力沙汰と化した紛争のはげしさが推測されるのである。結局は
「農村としても既に莫大の被害を受けつつあるに鑑み要は天災の然らしむる処として互に
自重し事なきを得たり」というが、この水害では被害は18万円に達したのであった。(略)

『よこゑ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』

(平成26年3月発行) から抜粋

(略) この木材留場に滞積した木材が川の水位を上げ、洪水を助長しているとして、農
民が留場を切って木材を放出せよと要求しましたが、木材業者は木材放出を阻止せんとし
て睨み合いになりました。中に立つ戸長や巡査は本庁に伺いを立てましたが、そのうち農
民側は多くの応援を得て警察の指示を待つて木材を止めであったワイヤーロープを切断し
てしまいました。そのため木材は海に流れ出て、木材業者は数万円の被害を受けたとして
います。また、留場を撤去して減水したのは僅かに3分過ぎなかつたともいわれており、
農家の被害もさほど甚大なものではなかつたように『北海タイムス』には「かくの如き増
水は殆ど毎年ある所にて昨年の如くは約8尺の増水を見たり」とありました。